

# 第一回全国同人雑誌最優秀賞決定

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第一回全国同人雑誌最優秀賞の選考会が八月一八日奥多摩の憩山庄で行なわれました。

全国からの事前投票者二一名をもとに、当日参加選考委員一八名、特別選考委員七名により、候補作「壺中美人」(高下俊哉／『空飛ぶ鯨』6号)、「どこかでなくした左の世界」(古澤崇／『じゅん文学』45号)、「乙姫通り」(宮崎眞弓／『いかなご』2号)、「エスプレッソが冷めたら」(水木怜／『照葉樹』2号)、「ばら屋敷」(名村和実／『海牛』26号)、「両手にありがとう」(本城確／『相模文芸』14号)の作品について激しい議論が交わされました。それに基づいた投票の結果、第一回全国同人雑誌最優秀賞は名村和実「ばら屋敷」(『海牛』26号)に決定いたしました。

ここに決定とその内容を報告するとともに、賞状・記念トロフィー・賞金五万円を贈り、受賞作品を賞揚したいと思います。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈願し、全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。第二回の全国同人雑誌最優秀賞対象の同人雑誌は二〇〇五年一月一日より二〇〇八年六月三十一日までの発行の同人雑誌とさせていただきます。奮って御応募ください。

なお、現在全国同人雑誌最優秀賞に親しみやすい名前を募集しております。次回はその名前で呼称したいと思えます。御期待ください。

## 全国同人雑誌最優秀賞「ばら屋敷」名村和実(『海牛』26号)

### 受賞の言葉

名村和実

「全国同人雑誌最優秀賞」に選ばれるとは、思ってもみませんでした。有難うございます。

全国に同人雑誌がどれくらいあるのだろうと『文藝年鑑』を調べてみますと、小説評論部門だけで四八七あります。この数字は、まだまだ日本の文化を支える礎であると言えるでしょう。文学界編集部同人雑誌係に寄せられる同人雑誌の数は、数年前までは一〇〇冊以上送られてきていたと思いますが、今は七〇冊程度ようです。それでも毎月、相当の作品が生み出されています。

年金受給年齢を引き上げて、ある程度の年配者にも、もう少し働いてもらわなければならないという世の中です。同人雑誌作家は高齢化しているといわれますが、その高齢化こそがエネルギーではないかと思うのです。

また、同人雑誌は、よく眺めてみると、若い方々が意外と多く、文芸熱も高く現代の風潮をよく勉強しています。年配のエネルギーも若い人達の文芸熱も、同人雑誌の中にまだまだ埋もれています。そうした人々や作品を発掘するため、同人雑誌作品を対象とした全国的な「賞」があってもいいのに、と前から思っていました。中部ペンクラブの「文学賞」がそれですが「中部圏に籍を置く同人雑誌に発表された短編小説」となっていて中部圏が対象です。



### 名村和実

なむら かずみ

1944年生まれ 鈴鹿市出身

1997年「太宰治論」などで三重県文学新人賞受賞(評論部門)

2001年 小説「手廻り山行」で中部ペンクラブ文学賞受賞

短編小説集『ジギ谷』

中部ペンクラブ副会長

文芸誌「海牛」「文芸中部」

「宇宙詩人」

全国の同人雑誌を対象とした「賞」が出来てもいいと思っていたとき、文芸思潮の、このたびの企画を知りました。喜んで参加させていただいたわけですが、こういう賞が企画されたということが、最も嬉しいことです。その第一回に選ばれ二重に嬉しく思います。今後、もつともっと優秀な作品が受賞し、同人雑誌文芸が文化の牽引力になっていくよう賞の発展をお祈りします。同時に、それに負けない作品を書いていきたいと思えます。

# ばら屋敷

## 名村和実



伊垣村、上ノ井地区の外れに、ばら屋敷と呼ばれる家があった。敷地の周りを野ばらで飾っていたからだ。飾るといふより、伸び放題と言った方が当たっている。杉下は、幼馴染みの、植松の後に付いて、シシ狩りに出かけた帰り、ばら屋敷の噂を聞いた。ひと山越えた反対斜面の一軒屋だから、村人も訪れることがない。滅多に顔を合わせないのは、ばら屋敷に限ったことではない。地区が異なれば、年に一度か二度、祭りの時に会うくらいである。だから気にしなくていいのだが、新聞を止めたという一言が、どうも気になる。

山の谷間を縫って染川が流れている。この川沿いに県道百四十二号線が走っていて、下ノ井地区から上流に向かって中ノ井、上ノ井となっている。その先に人家はない。山間を通り抜け、村境を越えて行けば、国道に出て山脈越えになる。峠を越えれば隣の県だ。

井ノ垣は、下ノ井から山の斜面を登って上に出たところの台地で、伊垣村の役場があり、人口も多い。役場まで徒歩なら四十分ぐらいだが、車で行くとなると、幾つもの山裾を大きく迂回するので一時間半はかかる。道路は、山の反対側の県道三十五号線を用いるので、川沿いの三ノ井地区とは生活圈を異にする。下ノ井、中ノ井、上ノ井の三地区を併せて三ノ井と言った。逆に下ノ井から下流に、車で五十分も下れば漁師町に出る。国道

をさらに十分上ると人口三万の、亀井市の市街地に出る。日用品や衣料は、この亀井市まで出る。

下ノ井には五軒の集落と、脇道に逸れたところに二軒と計七軒ある。脇に入ったところの一軒が杉下の家だ。比較的近くの中ノ井には、三軒と川向こうの中腹に一軒ある。上ノ井は、山裾を二つ越えて向こうだから、飛び離れて遠い。一番過疎化がひどく、県道脇に二軒と、山向こうのばら屋敷と三軒しかない。

バスは一日三往復走っていて新聞配達も兼ねている。停留場が中ノ井にあり、その前にある植松の家に、十四軒分まとめて置かれるのだ。中ノ井は、昔は二十軒ほどの集落で人口も多い方だった。その名残で停留場がある。植松の親父さんがバイクに乗って下ノ井と上ノ井に持っていく。新聞を置く一軒の他家は、置かれた家へ取りに来ることになっている。新聞を置かれた家は、出ることがあったり、親切で持っていくこともあるが、上ノ井のばら屋敷へは、毎日持つて行くことはできない。またばら屋敷も毎日取りに来ることは容易でない。乗り物は自転車すら使えない。山道を登って下って片道三十分かかる。三日に一度あるいは一週間に一度、まとめて取りに来ていたそうだ。最近はその大儀になったのか、半年前に新聞を止めた。止めてからは殆ど様子がわからないという。

杉下は、村に帰ってきて三ヶ月になる。まだ日が浅いので戸惑うこともある。しかし高校を卒業するまで住んでいたのだから、知らない人たちではない。遠慮することなく聞けば快く教えてくれる。来たときは、みんなに歓迎された。何と言っても二歳下の植松が一番喜んだ。同年代の殆どは外に出てしまっ、植松だけがこの村でがんばってきたのだ。

杉下は、高校を卒業すると街に出た。就職を都会に求めたのだ。山の上にある井ノ垣の家まで脚で登って三十分、預けてある自転車で高校まで一時間かかった。クラブ活動も充分に出来ず不便だった。だから田舎が嫌いというわけではないが、一生をこの地で過ごすという気にはなれなかった。都会へ出てみたかった。あこがれていたのだ。両親と妹を残して大きな街へ出た。

職場結婚をし、子どもが出来て妻は会社を辞めた。郊外に家を立て、いつの間にか定年退職し、妻と二人きりに戻っていた。熟年夫婦が、過疎地の空き家となった農家を買って、住んでいることをテレビ放映していた。何か物足らなさを感じていた杉下は、妻の美代子に田舎で暮らしてみたいと話を持ちかけた。「あーら、その歳になってお義母様のお乳を飲みたいなくなったの？ どうぞお一人で」と、取り付く島もない返事だった。父は既に死に、妹は嫁いで、八十歳になる母が一人、今もかくしゃくとして暮らしている。

父が十年前に入院して亡くなるまでの三ヶ月間、美代子は下ノ井の実家に移り住み、妻にとつては義母と二人で暮らし、交代で父の面倒を見た。隣近所ともうまくやっていたようで、嫁と姑の仲が悪いと言っわけでもない。今回一緒に来ないのは、定年になって杉下の甘えが出てきたと思っけているらしい。美代子は「お義母様にもしものことがあったら、いつでも駆けつけますから、ご安心なさいませ」とも言うのであった。妻は、若いときに身に着けた華道の免許を生かして先生をしている。公民館活動で忙しく充実しているのだ。一戸立ちマイホームを無住にするわけにもいかない。息子や娘が、孫を連れて帰ってくる場所を、人気のない冷たい空間にするわけにもいかない。自分たちの生活の場を守りつつ、夫のわがままも聞き入れる、美代子なりの計算が出来ているのだ。

ばら屋敷

杉下は、植松の「堅苦しゅう考えんときんさい、別荘暮らしをすると思

うて。おふくろさんも喜ぶじゃろ」という勧めもあって、来てみたのだ。

母は実に元氣だ。この歳になって、毎日畑に出て畝を振るうことを怠らない。一緒に畑仕事に出ても、六十一になる息子の腰を痛めてはかどらない。茶目っ気もいまだに旺盛である。美代子さん、一人で放つといて大丈夫かえ、と言う。あのカルチュアというやつが危ないんじゃないか、と言ってこちらの顔を覗き見るように窺う。

先日夕食のとき、ばら屋敷のことを言い出した。「昌ほう」。杉下の名は昌明で田舎では、昌ほう、で通っている。「藤子さんとこ行っちゃいけん」という。ばら屋敷の娘は藤子と言った。牽制球を投げて来たのだ。娘と言っても杉下より五歳下だから、数えてみれば五十六歳になっている。藤子の家は先代から山持ちで、住んでいるところから奥へ、ふた山とも自分の山だ。時代とともに山の仕事も実入りが少なくなつて、手入れが行き届かず、今は殆どが荒れているという。

杉下の家と藤子の家はなぜか、昔から仲が良くない。理由はわからない。人が死ぬとあそこの家は崇<sup>たか</sup>られていると噂するのだった。

杉下が高校三年生の時、藤子はまだ中学一年で、両親と祖父と五人暮らしだった。祭りの夜、妙に藤子と気が合つて遅くまで無駄話をしていた憶えがある。主にクラブ活動の話だった。藤子は体格が良かったのでバスケットボール部に勧誘されて入ったが、ああでもない、こうでもないと言げ口するような話だった。青臭い子どもっぽい話だと、心では思いつながら、兄のように頼られて悪い気はしなかった。それから、村の子ども達の間で二人は仲が良いという噂が立った。母から「付き合っちゃいけん」と注意されたが、もともと付き合うというような感覚はなかったのだ、大人のうるさい線言として気にしなかった。年を越して、杉下がいよいよ村を出ることがはっきりして来た頃は、取り立てて二人のことを言う者もいなくなっていた。

出立の一週間ほど前だった。神社の、境内裏の空き地で二人は会った。帰って来るか、と言うので、帰って来ると約束をして手を握り合った。杉下は軽い気持ちだった。中学二年になろうとしている藤子は、もはや大人になった気分だったのかも知れない。杉下から見れば、まだ中学一年生で

青葉の匂いが拭えなかった。相手を慰めるつもりで、その場の気持ちを静めるために、安易に約束をしたのだった。

都会に出てしばらくすると、藤子から手紙が来た。二、三回文通したが、日常に流され途絶えてしまった。自然な成り行きだと考え、気にもしなかった。交通費を考えると、何度も家に帰るわけにはいかない。二年後の正月に帰ったが、近所の人に会っただけで戻った。

さらに三年後、杉下二十二歳の秋。就職して五年目の時は、村の祭りに併せて、休暇を取って帰った。このとき、高校三年生になっていた藤子に会った。藤子に会ったのはこれが最後である。藤子は、祖父母二人とも統いて亡くし、病弱だった母までも亡くしていた。藤子の父と二人暮らしになっていた。杉下の母は、ののしるようにはそほと話すのだった。「呪われてる、あんな所に増築したのがいけん、祟りだ」と言いつつ、藤子の祖父母達が次々と亡くなったときの状況を、根掘り葉掘り話すのだった。母の意図とは別に、杉下は内緒で、藤子の家を訪問することに決めた。

母には、井ノ垣の友達に会ってくると嘘をついて、藤子の家に行った。藤子の父は、よく来てくれたと喜び、早速酒の用意をしてくれた。杉下は仏壇の前に座り、線香をあげてから黙祷をした。それから子どもの時分に会ったきりで、随分と長い月日の経ったことを、懐かしんで話しかけた。藤子の父も、杉下の家をさほど快くは思っていない。けれど息子の昌明にまで、その態度を表すような浅はかな人ではない。むしろ「若いのに、よう足を運んできんさった」と本当に喜んでくれている。杉下が、お父さん、と言って呼びかけるので、くすぐったく思ったのか「この先も、そう呼んでやんさいね」と言った。自分に対して悪い気持ちは持っていない、良い印象を持ってくれているとわかったが、一瞬言葉の意味が理解できず、応えることなく次の話題に移って行った。

酒の肴を作って出してくる藤子は、とても高校三年生には見えず、家庭の主婦のように思えて一瞬ドキリとした。青臭いと思っていた藤子が、年に似合わず年配の熟女に思えたのだ。藤子も杉下と同じ高校だったので、学校の話すれば尽きることがない。話を切り替えて、先生の転出転入のことなど、学校の様子を尋ねた。藤子は高校に行っただけでもバスケットを続けていて、背丈も胸も一段と大きく成長していた。父親が席を立って

ど躰してしまった。まだ都会に未練があったのだ。杉下は藤子が嫌いではなかった。むしろ好いているといつてもよい。しかし将来を考えるまでにはならなかった。都会での生活を続けたかったし、そこでの自分を、もつと試したかった。藤子の気持ちもよくわかる。空き地の端に、誰が植えたのか野ばらが小さな花を付けていた。杉下は折って取り上げ、藤子に渡した。藤子は受け取って「棘に刺されるといつまでも痛いんじゃけ」と言った。杉下は家まで送るつもりで、一緒に帰ろうと言ったが、藤子は強く否定した。あの後、ばらをどうしたかわからない。

街に戻って日常が始まると、田舎のことはすっかり忘れていた。目先の毎日を生きていくのに精一杯であった。すっかり都会の人間になっていた。二十七歳で結婚したときも、式を田舎で挙げるなど、思いもしなかった。職場と、そこでできた友人関係を中心として、都会のホテルで行った。杉下が結婚する噂は、それとなく田舎でも流れて、藤子からも祝の品が実家に届けられた。型どおりの返しをして時は過ぎていった。

杉下は、子供が出来てから、正月と夏には、妻の実家か自分の実家へ帰省するよう心がけてきた。けれど、仕事の都合もあり、毎回というわけにはいかない。子供が大きくなってくれば、実家ばかりではなく家族旅行も楽しみたい。そんなわけで、田舎のことは、遠い国の出来事のようになっていたが、帰れば何かと母から情報が入る。

杉下三十一歳、長男が三歳、長女一歳になった年の正月、家族で帰省したときだった。母が「ばら園の藤ちゃんが」などと話すのでいぶかしく思った。聞いてみると、家の周りに幾種類かのばらを植え、きれいに手入れしているの、誰とはなしにばら園の藤ちゃん、と呼ぶようになったらしい。藤子は、父親一人を残して、家を出るわけにもいかず、バスで一時間かけて出たところのスーパーで働いていた。家ではばらを育てて楽しみにしているのだと思った。

話を聞いていた妻の美代子が、そのばら園を見に行きたいと言い出した。母は即座に否定した。杉下の家とあまり仲のよくないことを察知した美代子は、以後ばら園のことは口にしなくなった。夕食の後、美代子は子供を寝かせるために座敷に引き上げた。その後母は、声を潜めて藤子の父の悪口を言うのであった。聞いていても何が悪い

る間に、祭りが終わった次の日、神社裏の小さな広場で逢う約束をした。村の祭りも人手が少なく、省略々々で味気ないものになってきているが、村人が顔を合わすと言うことでは、大切な行事だ。行事の終わった夜は、植松を中心に、この村だけでなく近郷の若い者を集めて酒を飲んだ。藤子の家のことは、あまり話題に上らなかつた。出るには出たが、すぐに別の話題へと流れて行くのであった。

翌日は二日酔いで頭が痛かった。午後になってようやく我を取り戻し、急いで神社裏の空き地に行くと、藤子はすでに来ていた。木に凭れての立ち話だ。頭の、髪の毛が杉下の目の高さにある。並んで立つと、随分成長したことがわかる。藤子の若さが眩しくて気後れるが、表には出さない。「大きくなったね」と話し始める。

都会での暮らしぶりを聞くので、街の様子やアパート周辺の住宅街のこと、繁華な駅前街の様子などを、できるだけリアルに話した。杉下は、藤子が住んだことのない街の暮らし振りを、聞きたがっているのだと思いついて話していた。けれど、そうではなかつた。杉下が街の暮らしを気に入っているのかどうか、現在の気持ちを確かめるためだったのだ。

話の腰を折って「それで、いつ、帰って来るんじや」という。言葉の意味がすぐに呑み込めなかつたが、五年前、同じこの場所で藤子の言った言葉思い出した。中学一年のまだあどけない少女の言葉として、さほど気にも留めていなかった。同じ言葉を再び聴いて、大きくなった藤子の体重が、のしかかってくるように思われた。

いつの頃だったか、山桜の根元から、ひよるひよると、小さな青い葉っぱを付けて、芽を出している草のような若木を引いて来て、屋敷に植えた。今では庭の王者のように成長して、季節になると花を咲かせている。重機で引き抜こうにも、一筋縄でいかないほどに、丸々と太くなった幹を輝かせている。以前「帰って来るか」という言葉に、安易に約束をしてしまった。その言葉が、庭の山桜のように生長して、いま目の前に突っ立っている。

杉下は言葉に詰まった。藤子は黙っている。杉下の方に向き直って目を瞑った。杉下は藤子の肩に腕を回し、軽く抱いた。髪の毛が鼻孔に触れ、微かなシャンブーの匂いがした。豊かな胸の感触に、強く抱きしめたい誘惑に駆られたが、出来なかつた。藤子は明らかに接吻を求めている。けれど

のか理解ができず、むしろいい人のように思えて、話の内容が頭に残らない。そんな曖昧な話の中で、心に引く掛かっていた言葉は、藤子は、結婚しない、と言っているらしいことだ。なぜだかわからない。ばら園を始めたといいことにも、何か引く掛かるものがあった。けれど瞬間に正月が過ぎていき、街に戻って日常が過ぎていった。

その後も、下ノ井の実家へは二、三年毎に帰省していた。ばら園は少し有名になり、地方新聞で取り上げられたこともあって、遠くから訪ねてくる見物客もあるという。母は相変わらず、つべこべ言っていたが、その話を聞いて心ひそかに嬉しく思った。藤子が立派に故郷を愛し守っていてくれるのだと思うと、心強かった。霧が晴れるような気もした。街に出て帰らなかつた自分に、ほんの少し心が痛んだ。藤子のために何も出来ないが、心の中だけでも、応援しようと思うのだった。

一つ理解できないことがあった。井ノ垣や三十五号線から観に来る人もいるという。そんな山道はなかつたはずだ。訊ねてみると、ばら園の奥の山に吊橋が出来て、井ノ垣の中央を通る三十五号線に出やすくなったそう。ここでまた母の一演説があった。便利になったのはばら園だけで、三ノ井の者には、米ひと粒の利益もないと、ぼやくのだった。吊橋は、ばら園のためだけに出来たわけではない。山仕事や炭焼きには、どうしても必要な道なのだ。

杉下は想像してみた。吊橋を渡って、山を登って下って、又上ってその向こうの高台に出るのだ。一時間以上はかかるだろう。下ノ井は、裏の山道を登って井ノ垣に出る昔からの道がある。そのことを考えれば、上ノ井に吊橋ができたのは、当然と言えるし、遅いくらいだ。景観がよさそうな感じがする。

杉下四十七歳、長女が十七歳のときの夏、妻と三人で下ノ井の実家に帰った。長男は大学に行って好きなことをやっている。長女も、もう一年大きくなれば付いて来なくなるだろう。父母が健在のうちに、できるだけ来ておきたいと思った。父は口数が少なく殆ど話に加わらない人だが、長女が来るとニコニコしている。長女もまたお祖父ちゃんっ子で、十七歳にもなつて、子どものように甘えている。

母は何かにつけて「昌ぼう」と杉下に話しかけてくる。それを美代子が



一緒にあって聞いていた。藤子の家の呼称が「ばら園」でなく「ばら屋敷」に変わっていた。藤子の父親がかなり弱ってきたこともあるが、藤子が手入れをしなくなると、荒れているというのだ。その上、奇妙なことを言い出した。五、六歳くらいの子が居るといふ。親戚の子が遊びに来てくるのかも知れないし、貰い子をしたのかも知れない。取り立てて言うことではないのだが、藤子の子ではないのかと、勘ぐるのである。そういえば五、六年前、入院していたのか半年ばかり藤子を見かけなかったとか、あれは子どもを産むため身を隠していたのだとか、あることないこと噂するのだった。母の話は大ききで信用できない。植松の話では、どんないきさつがあったのかはわからないが、貰い子をしたということで、余分な尾ひれは全くなかった。

杉下は年齢を練ってみた。藤子は四十二歳だ。藤子の父の年齢はよく知らないが、七十歳になるかならないかだろう。少々弱ってきたとしても、藤子はまだ若い。なぜ庭の手入れをしなくなったのだろう。こちらのほうが気にかかる。杉下は、ばら園が荒れてばら屋敷になっているらしいことに、胸が痛んだ。

この後、子供達と一緒に実家へ帰ったのは、父が亡くなった時だ。杉下五十一歳、親子四人はばらばらに暮らしていた。長男は就職して一人暮らしをしていたし、長女はまだ大学生で下宿していた。妻は数ヶ月前から母と実家に住んでおり、逆に我々を迎える立場である。葬儀が終わったら未練を残しながらも、みんなそそくさと戻っていった。杉下自身もゆっくりしていることができなかった。職場がゆるささない。ばら屋敷の噂は、殆ど聞くことなく元の生活に戻った。

しばらくして、妻の美代子が実家から戻り二人の生活が始まった。病床の父の付き添いのためとは言え、三ヶ月も杉下の実家で過ごしたのだ。妻にとっては、夫の実家で姑と二人、生活したわけだ。杉下の良いことも悪いことも、幼い子供時分の、己の知らないことまで情報を得たのではないかと気にかかる。それとなく誘いを入れると「気になる？」と言って、結局は色々喋ってくれる。しばらくは食卓の話題も事欠かさなかった。しかし、ばら屋敷のことや藤子のこととは、一言も出てこない。杉下は自分から聞くのも気が引けて、そのまま月日は流れていった。

反対側の山に、三十年前吊橋が出来た。それを通って三十五号線へ出れば井ノ垣はすぐ近くだ。けれど一時間もかかる。井ノ垣へ出て買物するにはよいが、背に荷物を背負って一時間かけてまた戻らなければならぬ。それより、バスの時間を見計って上ノ井へ出て、手を上げれば停留場でもなくとも停まってくれる。バスに揺られる時間は長い、買出しは未だに三ノ井側の県道を使うことが多い。

ならばもう少し、情報が入ってきてもよさそうだが、このところと噂すら聞かない。杉下はとにかく訪問してみることだと思ひ、思い切つてばら屋敷の玄関の前に立った。一時はばら園として、観光客が訪れたこともある面影がわずかに残っている。家の裏に広がる広大な平地に、かつては幾種類ものばらが手入れされて、見る人の目を楽しませてくれたであろう構築物の残骸があった。

杉下は思った。ばらがダメなら、イチゴとかナシとか、作つたらどうか。井ノ垣から三十五号線を上つて山に入り、吊橋を通つてばら屋敷までをハイクングコースとして売出す。イチゴ狩りなどを楽しんでもらつて、帰りは上ノ井に出て、中ノ井からバスに乗って帰ってもらおう。儲けようという考えではない。人の来ない裏ルートとして売出せば、それなりにやりがいがあるのではないか。などと思つたが、長いサラリーマン生活を送つて、今は無事定年退職した、世間知らずのご隠居さんの、たわ言のように思えて、現実を見直した。

家の中から五、六歳くらいの子が出てきて「どちら様ですか」とはつきり、標準に近い言葉で問いかけてきた。杉下は、話に聞いたことのある、貰われてきた女の子だと思つた。「杉下という者ですけど、お爺ちゃんか……」とまで言つて藤子をどう呼んでいいかわからず戸惑っていると、奥から「下ノ井の昌ほうかえ、あがりんさい」という懐かしい言葉が飛んできた。藤子の父は臥せていた。ちよつと無理をして風邪をひいたらしい。このごろとんと身体が弱つて、家の中と回りの草取り程度しか出来なくなつた、ちよつと無理をしたらこの通り、寝込んでしまう始末で、と気弱なことをほそぼそと言う。ご飯の煮炊きやら買い出しも大変だね、と誘い水を注してみる。「この子が利発な子でよく言うことを利いてくれて助かっている」と、はらこ、はらこ何度も名を呼ぶ。よほど可愛いのだろう。

父が死んでから十年が経つ。杉下は自由な身になって、下ノ井に帰ってきた。この歳になつて帰つてきて、藤子に合わせる顔はないのだ。けれど、新聞を止めたと聞いて胸騒ぎがする。ばら園が荒れていると聞いて十四年になる。藤子は五十六歳になっているはずだ。けれど杉下には十七才の藤子しか想像できない。

小骨の多い魚を食べると、魚肉と骨を分けるのが面倒で、この程度ならいいだろうと食べてしまう。喉の奥に細い小骨が引っかかって、なかなか取れない。一週間経つても二週間経つても取れないことがある。胸の中に引っかかった棘は、いつまで経つても取れないばかりか、年月とともに、徐々に緩やかに成長していることさえある。杉下は六十一歳という自分の年齢を忘れて、二十二歳の時、神社裏で話した藤子が蘇ってくるのだった。

母の妹が隣の町に嫁いでいて、妹達と月に一度お茶をする。一日中噂話をして時間を潰すのだ。大方は母の方が出かけていく。向こうは少々街で、近くにスーパーマーケットもある。欲しくなった物を買いに走るのに便利なのだ。母と同年の夫と二人暮らしで、ちよつと良い茶飲み友達である。

母が一人暮らしの時は、朝のバスで漁師町まで出て、国道を走るバスに乗り換えて行っていた。杉下が帰つて来てからは車で送っていく。杉下にとつては叔母さんの家だ。今回は母が泊まると言っているので、杉下も泊まるようしきりに勧められた。けれど用があるからと断つた。この機会に、昼からばら屋敷を訪ねるつもりだったからだ。

三ヶ月住んで、子ども時代の感覚がかなり蘇つて来た。だいたい山道にも慣れてきて、杉下は獣道を歩いて藤子の家まで行くことにした。会えば三十九年振りだ。何から話しかけようかと思案する。山が開けて谷間の平地が見えてきた。ばら屋敷の庭だ。周囲は奥深い山に囲まれて、道路一本通っていない。藤子の家には、畑や山仕事に必要な、荷車やリヤカーはあつても、乗り物は自転車すらない。あつても周囲が山では使えない。奥の山から滝が一本落ちていて、滝つぼから流れる水を引いている。ばら屋敷専用の水道だ。実に長閑である。人はどこからも入つて来ない。ばら屋敷に用のある者しか、入つて来ないのである。

生活道路の百四十二号線沿いの上ノ井へは、山を登つて下つて三十分か山に囲まれた、原つばの一軒家に生まれたから、藤子が原子と名付けたらいい。

原子がお茶を入れて持ってきた。お菓子も添えてある。よく出来ている。「お母さんは？」と訊ねてみると、原子は「きになつて帰れなくなったの」と言う。何が気になつているのか、藤子の父に問いを振り向ける。藤子の父は苦笑して「実は」と話したことは、一週間前から藤子が家に帰らなくなったという。杉下は慌てた表情をして見せた。「捜さなければ」「黙つていいののか」という姿勢を見せるためである。父は「放つていてやんさい」という。藤子は、若い時から今まで、自分を犠牲にして生きて来た、一度ぐらゐ、家を数日、空けることがあつてもいいではないか、というのが父の見解だった。

しかし、杉下には、そう思えなかった。半年前に新聞を止めたと聞いて、気になりだしたが、それどころではない。ここ数日の内に何かが起こつていゝ、藤子の父が思つていゝようなことではない。この五、六歳の原子も気になる。貰い子の話を聞いたのは、たしか長女が高校生の時だった。その長女が結婚して子どもまで居る。どう考えても十四年前の話だ。原子は歳を取らないのか。そんな奇妙なことは考えられない。杉下は、臥せている藤子の父には悪いけれど、聞けるだけのことは聞き出しておきたいと思つて、原子の身の上を訊ねた。

原子が席を立っている間に、口早に語つたことは、藤子が自分の子として育てた娘が、中学生の時に子どもを産んだ。その子が原子で、今五歳だという。娘は卒業するまでもなくどこかへ行つてしまったそうだ。もちろん卒業証書はもらつていゝし、卒業したことになつていゝ。藤子がどんな苦勞をしたか想像がつく。

藤子の父は、話と連れて、どうして藤子は結婚しなかったのか、それだけが何としてもわからないと嘆く。親の口から言うのも変だが、器量よしの方だし身体も丈夫だ。ちよつとぶつきらばうなところがあるが、氣立てはやさしい。いいお見合いの話も何度かあつた。けれど藤子の方が浮かぬ顔をする。好きな男がいるのかと思えば、それでもないらしい。先方が何度か足を運んでくださったこともある。このポロ屋に、養子に入つてもいいという話もあつたのに、藤子は返事をしなかった、という。

杉下は別の話題がないものかと、部屋の隅を見渡した。今では珍しい針で鳴らすレコードがあった。原子が視線を感じて、レコードにスイッチを入れようと駆け寄った。乗っているレコード盤の曲名は見ただけで「野中のばら」だとわかった。杉下は制して外へ出ようと言った。

外は昼下がりの太陽が眩しい。六十一歳の杉下は、五歳の原子に手を取られて、恋人同士が野原を行くような錯覚に陥った。原子は、久しぶりに安心して、喋ることの出来る相手が現れて楽しそうだ。どんと山裾を回り込んで行く。きになって動けなくなったお母さんに、会いに行くのだと言う。きになるって、何が気になるのかと問うと、気にする気じゃなくて、お母さんが、山に生えている植物の木になってしまったというのだ。

「お母さんって、藤子さんのことだね」と念を押す。そうだという。本当はお祖母さんなのだが、お母さんで通してきたらしい。

杉下は、まさか本当に藤子が木になったと信じているわけではない。しかし、家に帰らなくなって一週間が経つのは事実だし、原子の言っていることは理解できないが、木になったというタイミングだけは合う。一緒に行けば何かを掴めるかも知れないという期待がある。

原子は突然振り向いて言った。目の瞳が青く光ったように思えた。「小父ちゃん。お母さんのこと、心配して来てくれたの？ どういう関係？」子どもは他愛のないことを喋っているかと思えば、時にビククリするようなことを、ずばり問うてくる時がある。子どもはかわいいが、時折ひらめく感覚が、怖くて恐ろしい。藤子との間に、取り立てて言われるような関係などない。しかし、五歳の原子は何かを感じ取っているのだろうか。「関係など何にもないよ。お爺さんはいぶ歳を取ったし、どうしているかなと思ってる」とさりげなく言う。「ふうん」と素直に納得した。

吊橋の前に来た。杉下は初めてだった。原子は、眼下に霞んで見える谷底を、ものともせず、ひよいひよいと跨ぐように駆けていく。杉下は足がすくんで躊躇した。何しろ三十年前に出来たものだ、鉄がさびている、ロープは大丈夫か、心配が先に立つと足が出ない。原子が戻ってきて「小父ちゃん、怖い。手を繋いで行こう」という。五歳の子に手を繋いでもらったら、大丈夫ってことはないだろう、と心の中でつぶやいてみるが、今は優しい原子の言葉だけでも頼りだ。三十年の間には何度も架け替えられた。

しかし、自分の奢りかもしれないと思いつく。藤子からすれば、木になって山と同化する事は、山の人間になり切ることで、仕合せなことなのかもしれない。杉下は考えようもなくたまたまばかりであった。後ろに原子が立っていた。原子の瞳が青く光った。「小父ちゃん、わたし、お母さんと話が出来よ」話、できるの？ なら頼む」即座に答えていた。長い言葉は無理だから、短い言葉にしてという。杉下はさっそく原子に「フリーデー」という人を知っているね」と藤子に訊ねてくれるよう頼んだ。原子は言われたとおり「フリーデー」という人を知っているね、と小父ちゃんが言っているよ」と大きな声で藤子の木に向かって言った。すると晴天の空にそびえる木の葉が、そよ風に揺られて、はらはらと鳴った。そして藤子の目尻から一粒の水が流れ落ちた。

どうしたのか原子が、五歳の子どものように大人のような顔をしていた。急に口数が減ってしまった。お母さんは何と答えたのか、知っていると云ったのか、知らないと言ったのか、問うても答えてくれなかった。「陽が暮れると、小父ちゃん、怖いから」と言うと、原子は帰り支度を始めた。帰りの道も、原子はやはり無口だった。その原子がやっと口を開いてくれた。「お母さんは、小父ちゃんの問いかけを聞いて、すごく喜んでいた」と言った。杉下は「教えてくれてありがとう」と原子の手を握って、感慨にふけた。杉下からの暗号が藤子に通じたのだ。それは藤子が一生掛けて発信し続けたシグナルを、傍受した者にしか思いつかない暗号だった。

吊橋のところを差し掛かった。原子は元の元気な子に戻っていた。杉下の手を引いて吊橋を渡っていく。中央付近に来たとき、原子が急に手をほいて向き直った。瞳が青く光った。「あんなに嬉しそうなお母さんの顔、見たの、初めて。家族のわたしにも見せなかった、あの嬉しそうな顔。いったい小父ちゃんは、何者なの？」杉下に言葉はなかった。

ているはずだし、山で仕事をやる人には、日常の通り道なのだ、と心に言い聞かせて何とか渡り終えた。「小父ちゃん、怖かった？」と言って原子がにっこりする。杉下は原子の手中にすっかり収まったように思われた。まだまだ山の人間になりえていないことを実感した。

橋を渡ると山の空気が一変した。重くどんよりした空気なのだ。吸うにも時間がかかるし、吐くにしてもゆっくり吐かないと全部出て行かないような気がする。いい天気なのに軽さがない。先に行く原子が振り向いてまたわらう。山の景色に溶け込んでいる。その原子に、引つ張られるような感じでしょうか。

原子は、昔ハイキングコースと言われた道を外れて、獣道に入っていく。ブッシュがひどくなってきた、方向感覚を失ってしまった。しかし、原子がしょっちゅう来ているところだと思って、安心して自分がある。五歳の女の子に手を引かれて、落ち着いている自分がおかしいように思うのだが、なぜか気分が安らかだ。

通り抜けると南に面した小さな高台に出た。木の匂いが違う。甘い匂いが混じってくる。杉下は、どうしてこの場所を知っているのかと、原子に訊ねた。原子はそれに答えず「お母さんがここにいます」と後ろの木を指差した。甘い空気の匂いが藤子の匂いだったことに気がつく。ここにたどり着いたときは気がつかなかったが、いま原子に言われて振り返ってみると、正に藤子がいるのだった。人の胸辺りの高さで、二股に分かれた大木があって、一方は天高く伸びている。もう一方が藤子だった。足腰は二股に盛り上がった木になっていて、胸から上が人間藤子だった。両腕もあるし耳もある。髪の毛もあった。杉下とは五歳違いだから藤子は五十六歳、少し若いように見えるが五十代の藤子だった。十七歳の時に会ったきりだが、面影が残っている。はつきり藤子だとわかる。

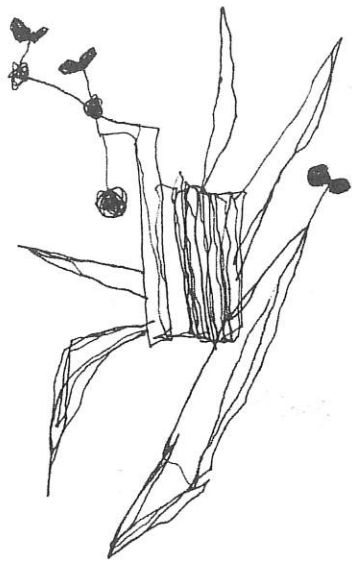
杉下は思わず駆け寄って手を握った。「昌ぼうだよ。杉下の昌ぼうだよ」と叫ぶと、顔をこちらに向けようとしたり。思うように首が回らないのか、足と腰が木になっている。口の動きも緩慢で、声を発するほどの動きがない。



名村和実

なむら かずみ

1944年生まれ 鈴鹿市出身  
1997年「太宰治論」などで三重県文学新人賞受賞(評論部門)  
2001年 小説「手組女山行行」で中部ペンクラブ文学賞受賞  
短編小説集『ジギ谷』  
中部ペンクラブ副会長  
文芸誌「海牛」「文芸中部」「宇宙詩人」





る。五歳だというのに、大人びた会話をする原子は杉下の手を取って、木に変身した藤子のもとに案内する。本作品のクライマックスである。大人の表情で大人の言葉を語る原子、木と化していた藤子。杉下との会話に満足して美しい笑みを浮かべる木になった。

名村は、この作品において、神話的時空が魅力を与えることを巧みに展開してみせる。まず作品の全体を視野に収め、人間精神の根源を喚起する活力の表象を森と泉として練り上げるのに成功した。また、さまざまな薫りや匂いが効果をあげている。川の匂い、森の匂い、ばらの匂い、藤子の匂い、原子の匂い。

この作品には、こちらとあちらとをつなぐ吊橋が象徴的に使われている。もちろん、吊橋のこちら側の匂いとあちら側の匂いも異なっている。よくぞ捉まえたこの機微を。この差異こそ異空間と異時間をつなぎ、語りを起動させる動因となっている。

原子は吊橋のあちら側では、大人の顔になり、大人の言葉を使う。だが、こちら側ではふつうの子になる。しかし、あちら側からこちら側に帰ったその時、原子は杉下に向かって、「いったい小父ちゃんは何者なの？」と問いかける。杉下は戸惑って、答えに窮する。

杉下がどう答えるか、語り手は直接には何も語っていない。だが、この問いは、読み手に向けて語り手が発した呼び掛けでもあるはずだ。さて、杉下はどう答えたらこの作品にふさわしいだろうか？

# 名村和実の妙技

—「ばら屋敷」の神話的時空—

## 堀内 守

名村和実の作品は挑戦的である。定型を破り、新しい視野を切り開こうとする。自由で創造的で、精神的だ。そして根源への回帰を象徴的に描く。だから生一本な読み手は、その象徴を手にとつて触れられるものに置き換えて読んで行き、先の方へ行ってから、もう一度はじまりのパラグラフに取つて返し、構えを変えて読み直しを始めるというようなことがあってもおかしくない。普段はわれわれの意識から隠されている約束事を、名村はさり気なく手繰り寄せ、明るみに出すのに長けているからだ。だから、一本書で読んでいくうちに、うつつやりを食ってしまった、いちばん面白いところを読み飛ばしてしまつてたというようなことも起こり得る。

このたび名村は、これまでの諸作品を「著作集」に編もうと決めた。新しい文脈に組み入れてみたら、各作品はまた別の呼応の場を作り出すだろうという目途で、『ジギ谷』と題する作品集は、その第一巻に当たり、すでに二〇〇六年の十一月に世に出ている。

この巻には、表題の「ジギ谷」を始め、「手組女山」、「ライファアミリー」、「ばら屋敷」、「骨を抱く」の五作品が収められている。いずれも個性ある文体によって独特の時空を創り出し、読み手を誘発する。前衛派なのだ。自然界の時間の法則を打ち破ろうとして詩的錬金術を駆使する前衛派なのだ。

とりわけ「ばら屋敷」は、語り手の妙技が時間を貪り尽くし、ある種の不滅性を生み出すのに成功している。漢字とかなを巧みに配置し、時間という謎に挑む。登場する地名は、並々ならぬ考証



### 堀内 守

ほりうち まもる



1932年生まれ  
東京大学大学院終了  
名古屋大学教授を経て  
現在同名教授  
2005年に名古屋で開かれた  
全国同人雑誌会議でも  
シンポジウムのコーディネーターをつとめた

## 井口時男

Iguchi Tokio

### 暴力的な現在

氾濫する暴力／変容する文学

いま、暴力と文学の交差する場所へ

「酒鬼薔薇聖斗」事件以後の文学を読み解く

文芸評論集

作品社 2800円(税別)

## 水 満

河林 満

### 文学界新人賞受賞

水道代が払えない家族を  
死に追いつめたものは何か  
表題作と「海辺の光」など  
母性と肉体の連結を希求する  
気鋭の作家の力作小説集

文芸春秋

1300円(税)

を通過して採用されたのがわかる。自然なようにいて、効果がちゃんと計算されている。名の連鎖がその地の起伏、高低、深淺から色彩、はては陰影までも、イメージ豊かに浮かび上がらせる。その中軸に浮かびくるのは、時を重ねて磨かれた人々の立ち居振る舞いで、無駄がなく、端正である。

記述される場合は過疎地であるが、神話のモチーフの一つである楽園を扱っていると解すことができる。

退職した主人公の杉下がそこにやってくる。若い頃、彼は都会に憧れて、この村を捨てたが、村とは切れてはいなかった。高校生の頃彼は、この村の少女だった藤子との淡い恋を経験していた。その瞬間、村は楽園だったのである。それは、杉下にとっては「淡い恋」だったが、藤子にとっては「至福の恋」だった。語り手は、この落差を劇的に対照させながら、それからの二人の何回もの邂逅を語り行く。諸場面は、変貌と贖罪、死と再生という超時間的な状態を出現させる。その状態は読者の心の深奥に潜む神秘的な調べと共鳴する。

時が過ぎ、都会で職を得、家庭を築いた主人公が家族を伴ってこの地に帰省した時、かつての恋の相手は結婚もせずに老いた父を介護し、ばら園を作っていた。ばら園はだんだん有名になり、見物客がやってくるまでになる。だが、その次に主人公が訪れた時、ばら園は荒れはて、人々が「ばら屋敷」と怖れる怪異な場に変貌を遂げていたのだ。藤子の姿がなかった。代わりに藤子の貰い子だという原子(はらこ)が杉下の相手をしてくれ

# 『海牛』と三重県の文学事情

名村和実

私が同人雑誌に、初めて小説を書いて発表したのは、一九九七（平成九）年三月のことです。三重県津市で発行されている『海牛』の十六号「骨を抱く」がそれです。すでに五十三歳になっていました。文学的に非常に奥手です。

『海牛』のそれ以前のこと、実際に見聞きしたわけではないので、私に語る資格はないのですが、参加するに当たって言い知れぬ不安がありました。ある文学仲間の長老から「君が『海牛』で文章を書くなんて、そんなことは考えられない、何かの間違いだらう、主宰の言葉を聞き違えているのではないか」と言われたのです。

当時『海牛』は、主宰の岸田淳子と、旭洋子の二名だけででした。十五号より古い冊子は、もちろん私にはないのですが、創刊号だけは何かの折に主宰からいただいたものがあります。それによると一九八八年三月、指導者（故）鳥山敬夫ともう一人いて、合計四人で発行しています。もともと少人数なのが『海牛』の体質らしいのです。八号から岸田、旭の二人で書いてきたといえますから、十五号まで二人誌だったわけですね。

ところがこの二人は、『文學界』や『海燕』（今は廃刊）等の同人雑誌に取り上げられるのは常で、文學界のベスト5の常連にもなっていたのです。二人ともそれぞれ単行本を出版しており、津市や三重県の文化奨励賞も受けている超ベテランでした。先の長老は、そんなところへ入ったら潰される、と私の身を案じて

くれたのでしよう。私自身も、鈴鹿市や津市で行われている文芸合評会で顔を合わせる程度で、さほど親しい間柄ではありませんでした。しかも鈴鹿に住んでいる私がどうして遠い津市の冊子に参加するのか、疑問が起ころうではないでしょうか。

津市といえば隣の市ですが、車で五十分程度もかかる距離にあります。

三重県には、一九六一年に、当時評論部門の芥川賞と言われた第三回近代文学賞を受けられた（清水信）がいて、自宅に全国同人雑誌センターを開設し、活発な文芸活動をしています。その地道な活動が認められて今年八十七歳で中日文化賞を受賞されました。老眼鏡も全く不要で一ヶ月に二百から三百冊の同人雑誌を読むという現役です。

毎月第一土曜は津市（津文学研究会）、第二土曜は鈴鹿市（鈴鹿土曜会）、第三土曜は四日市市（XYZ）、第四土曜は名古屋で開かれる作品合評会に精力的に出かけています。特に三重県で行われている三つの合評会は、二十から二十五人程度集まってくるのですが、元々会員名簿を持たないというのが特徴です。誰でも来たらずらに同人雑誌に入っているそれぞれの人は、さまざまな同人雑誌に入っている二十五部程度持っているの作品が掲載されている雑誌を二十五部程度持って来ます。一人で雑誌を発行している人は自分の個人誌を、発表する場を持っていないが自宅で作品を書いた人は、生原稿を二十五部程度コピーして来ます。作品



鈴鹿土曜会の風景

自分も誰かの作品を読んで、意見を言う機会が必ず与えられます。それを聞いて清水先生が口を挟みます。初めて来た人や、初歩の人の作品には、優しくして丁寧な言葉を、ベテランの作品には当意即妙の冗談を交えて扱き下ろすのです。そうした中に、文章の書き方から文芸の心得まで、それとなく散りばめられています。午後一時から始めて四時半までかかりますが、退屈することはありません。

清水先生は鈴鹿市在住です。鈴鹿の場合は、これで終わりと思っはいいけません。近くの喫茶店に席が用意してあって、出席者の半分程度が流れ込みます。また用があつて来ることの出来なかつた人が、この喫茶店に顔を現します。七時頃になると、さすが家庭の主婦達は帰り始めますが、残った者は食事をし、その後延々十時頃まで雑談が続きます。私はもう眠くなってしまふのですが、最後まで一番よく喋るのが八十七歳の清水先生です。こんな鈴鹿土曜会が

五十年近くも続いているというのですから、呆れるというか畏れ入ります。

なぜこんな話を持ち出したかといいますと、同人雑誌という一つのグループを超えているだけでなく、ジャンルも地域も超えて行われている合評会だということ。津の者が鈴鹿に来たり、鈴鹿の者が津に行ったり、四日市の者が鈴鹿に来たり、行ったり、名古屋からも岐阜からも来ています。合同で忘年会を行ったりもしています。一つの枠を超えた文芸合評会のあり様が、地理的感覚を薄め、鈴鹿の私が津の『海牛』で小説を書く切っ掛けを作り出した、ということが出来ます。話のあったとき、私は最後に、清水先生の自宅を訪ねし相談しました。いともあっさり「それはいいことや、大いになんばつてん、あの二人に潰されんようにな」私の身をさほど案ずる事もなく、冷たいのか暖かいのかわからないような、あっさりした言葉でした。私は、この機会を逃がしては自分が小説を書く機会はないだろうという思いもあつたので、とにかくやってみることにしたので。

そうして当初に記したように十六号から書き手は三人となりました。ところがこの十六号、旭の「石の柩」、私の「骨を抱く」の二作が同時に『文學界』同人雑誌評でベスト5に取り上げられたのです。やはりこういうところで取り上げられると、大きな励みになります。旭の「石の柩」は「季刊文科」四号に転載されました。さらにこの年は、それまでの評論活動が認められ私が三重県の文学新人

海牛 2006.5 26.



『海牛』26号表紙

海牛 1988.3.



『海牛』創刊号表紙



『海牛』同人

最後はひと言、『海牛』は全同人が書いても三人です。冊子の厚さも知れています。私のような新米の作品でも、丹念に読んでくださる方が多いので、ありがたく嬉しいことです。少人数であっても、ありがちな井戸の中の蛙に陥ることもなく、大勢の中で採まれているため、少数のメリットと多数のメリットと、両方いただいています。この三重での特徴を生かして、三人それぞれそれぞれの小説世界を切り開いて行きたいと思えます。

賞（評論部門）、岸田淳子は前年に書いた「漂流」で第十回中部ペンクラブ文学賞を受賞しました。この一九九七年という年は『海牛』にとって特別な年となりました。

その後、二〇〇一年に私が、『海牛』二十号の「手組女山行行」で第十四回中部ペンクラブ文学賞、岸田の『海牛』二十一号「ことば」が季刊文科十九号に転載されました。現在、海牛は二十六号を重ね、平均年一回という遅々とした歩みですが、挑戦することを忘れず、確実な一歩を進めて行きたいと思っています。

自分の所属する『海牛』を中心に、三重の文学事情を交え記してみました。しかも私が小説を書き始めた時からという、限られた（今）の視点からですから、三重の文学事情の全てではありません。小説中心では、『海牛』よりずっと古い老舗が、四日市では『海』、鈴鹿で『火涼』、亀山で『方圓』、津で『文宴』、『あしたば』といった同人雑誌が現役で活動しています。比較的新しい冊子や個人誌、評論や短詩を中心としたものを含めると、ここに挙げる事が出来ないほどです。

書いたことはないが、文芸に興味のある人は、手ぶらでやってきます。そのように作品を持って来た者は、受付に並べて置き、参加者が自由に手にしやすいうようにします。会場へ来た者は順次自由を持って行きます。こうして全員に配られた雑誌は、来月の合評対象となります。したがって、当日の合評対象は前月配布された作品です。参加者は、指導的立場の人から、中堅、初歩の人まで、まちまちですが、自分の作品を前月に配布しておけば、必ず誰かが意見を言ってくれます。

●海牛

代表・事務局◇〒514-0043

三重県津市南新町十一・二四 岸田淳子

TEL059-226-4582



## 両手にありがとう

## 本城 確



ほんじょう かたし

1936年岡山市に生まれる。  
1956年同志社大学入学。大東文化  
大学政治経済学部へ転学。  
1960年卒業。沖電気工業（株）の  
子会社キンセキ（株）入社。  
爾後、京セラキンセキとして京セラ  
の子会社になる。  
1999年退社。ベンチャーコンサル  
タント、上野の森美術館会員、陶芸、  
墨彩画、文芸等で活躍中。  
NPO法人設立準備中。

娘の結婚式で挨拶した。「両手いっぱいありがとう」

両手を失った人でないとそう思わない。あつて当たり前、空気と同じよ  
うなもの。両手がなくなつて猛烈に不便さ、差別感、惨めさ、落ち込み、  
恥らいを痛感した。絶望の淵を彷徨った。目から鱗が落ちた。人生の終り  
を悟った。

その言葉の裏にはこの晴れの場で、かつてのような責任感、緊張感、達  
成感のある体に戻りたいという不屈の心理が隠れていた。

旅二が運命に襲われたのは米の収穫時期だった。五五歳の時。

脱穀機を操縦しながら、崖つぶちで踊るような、横車を押したようなし  
ぐさをしていた。一瞥、横に気がとられた瞬間の出来事。脱穀機に左腕を  
巻き込まれる。

その腕を引き戻そうとして、右腕も引きこまれた。もがけばもがくだけ  
余計に抜けない。

痛さよりも何が起きたんだという驚きに我を忘れた。目の前は真っ暗。  
この状態から早く逃れたい一心であった。思い切つて腕を引き抜いた。腕  
はちぎれた。腕はなくなつていった。

突然、現実が怒濤の如くたち返つてきた。腕がない、腕がない。腕はど  
こだ。何が起きたんだ。額に脂汗が流れた。腕はどこへいったんだ。

「あなたどうしたんですか、何が起こったんですか」

あたりの血の海をみて、顔は真っ青になった。パニックになった。

「腕がない。あなたの腕はどこどこ？ どこにいったの……？ 腕は？」

旅二は返答する力はない。

京子は「だめだ、死んじやだめよ、死なないで……。がんばって。何で  
こんなことに……」

腰にぶら下げていたタオルを、旅二のもぎちぎられた腕の根元に巻きつ  
けた。片方の腕に巻くタオルがない。帽子の陽よけ布を破いて片方の腕に  
巻きつけた。白い布はすぐに真っ赤に染まった。わあすこい。

「落ちた腕はどこだ。早く付けなきゃ。脱穀機の下に血だらけになつて重  
なつている」

「これは酷い。付けなくちゃあ」

旅二の姿がまともに見られない。横目でみる。歯をへの字にくいしばる。  
震える手で、真っ赤な両腕を恐る恐る拾い上げた。それを束ねた藁の上に  
そつと横たえた。血だらけの腕は、黒紫色に見えた。腕の切断肉部分はグ  
レーみみたいな白だった。真っ赤な血がその白を塗りつぶしていた。複雑骨  
折か。とても繋げられる状態ではない。

京子は吐気がしてきた。ふらふらしてきた。もう駄目だ。「誰か来て。誰か。  
叫んだ」周りに誰もいないのを分かつても叫んだ。こんな悲惨な経験はし  
たことがない。

「医者、医者、早く。どうすればいいんだ。救急車を呼ばなきゃ。どうや  
つて呼ぶんだ」今まで呼んだことはない。呼び方がわからない。どうしよ  
う。パニックになった。

家に帰るには三十分かかる。とても間に合わない。かまわず叫んだ。  
「誰か来て……誰か。早く」京子は無我夢中で叫んだ。

近くの農道を、車がきた。郵便車である。京子は手を振って止めた。運  
転手の窓に駆け寄つた。「助けてください、早く」京子は叫んだ。  
運転手は真っ青な京子の顔を見て驚いた。血で真っ赤に染まっている手を  
見て目を丸めた。

「どうしたんですか」運転手は顔をしかめた。

京子は「腕がとれた。救急車、救急車を早く呼んでください。腕、腕を

早くつなげなくちゃあ。脱穀機の下を見た。ない。どこだ。俺の腕は  
……

垂れている血は、稲の刈り株を真っ赤に染めた。俺の血だ。水のように  
垂れる血。止めないと死んじやうよ。あるはずの手を動かしているつもり  
だが、なぜか脳が命令しているだけ。止める術の手がない。どうやって止  
めるんだ。抑える術がない。

旅二は京子を呼んだ。「京子お、きょうこ、きょうこ、きょうこ、早  
く来てくれ、早く……。死ぬよ」声は脱穀機の音で消された。

頭がもうろうとしてきた。立つておれなくなった。子どもの顔が浮かんで  
きた。俺の最後の声を、京子と子どもの和人と真由に聞かせておこう。

「京子早く来てくれ。誰か来てくれ、誰か」喉の渴きを辛抱して懸命に声  
を絞り出して叫んだ。

貧血を起こしてひざまずいた。膝に稲の刈り株が立って痛い。なぜか腕  
よりこのほうが痛い。倒れた。かすれる声になった。もうだめだ。叫ぶ元  
気はなくなつた。

畦に植えた枝豆を抜いていた妻の京子が、旅二が何か叫んでいるような  
気がした。何かあつたに違いない。どうしたのかなあ。脱穀機の方を見て  
も旅二の姿は見えない。脱穀機だけは動いている。異常に気がついて駆け  
つけた。脱穀機の傍で旅二は血まみれで倒れている。

早く……。早く腕を付けて下さい。つけて早く腕を……」

運転手は何が起きたのかさっぱり分からない。車から降りた。京子は旅  
二が倒れているほうを指さして「来てくれ」と叫んだ。京子の後を走つた。  
運転手の見たものは血まみれになつて倒れている旅二だった。その横に二  
本の腕が揃えて置いてあつた。さながら戦場だった。

旅二の灰色に変色した顔肌は、生きている肌ではなかった。運転手は死  
んでいるものと思つた。言葉が出ない。全身震えた。

「これは大変だ。早く救急車を呼ばなくちゃあ。その松島さんここで電  
話を借りよう」

30メートルほど先である。松島さんは郵便配達でしょっちゅう行く  
ところである。「すぐ救急車呼ぶからちよつとまって……」吐きすてるよ  
うに運転手は車で急いで行つた。

「松島さん、旅二さんが大変だ。死にそうなんです、電話貸してください」  
玄関の戸を開けてどなつた。返事はない。

誰もいない。留守のようだ。ダイヤル電話が土間の机の上にあるのは知  
つていた。

郵便局運転手は震えながら119へ電話した。急ぐ時は戻りが遅い。か  
かつたところは110だった。

「警察です。事件ですか、事故ですか」

「あ、いけない警察？ 間違えました。消防署にかけらんです。すみませ  
ん」

119へ掛け直した。

「腕がちぎれたんです。早く来てください。はやく」

「ちぎれた？」

「そう、ちぎれた」

「落ち着いてください。手がちぎれたとはどう言うことですか」

「なくなつたんです。はさまれて……」

「血が出ないようにして下さい。心臓より上にしといて下さい。寝かせて  
手を胸の上のせて置いてください。すぐ行くからね」

「手はないんだよ。だから乗せられないよ」

「住所は？ 目印は？」



「住所はわかりません。千里滝の裏の田んぼです。田んぼの中でタオルを振っております。僕は通りかかりの郵便屋です。赤い郵便車が止まっています。そこです。早く来てください。出血多量で死んでしまいます。早くはやく来てください。お願いします……」

「わかった。すぐ行くからがんばってください」

脱穀機は空回りしている。何事もなかったように。京子は発動機を止める方法知らない。

気がついたら浜井病院のベッドの上だった。目を真っ赤に染めた京子と長男の和人が脇に座っていた。

京子が「びっくりしたわよ。本当に。出血多量で死んだと思ったよ。人生がお終いと思ったわよ。ここへ来た時はもう冷たかったのよ、ほんと死んだと思った」

旅二は「死んでたまるか。おい腕は付いたのか、俺の腕は……」

京子は「先生は「つけられない」と言っている。『あんなグジャグジャな腕はとも付かない』と言っています」

「あなたの腕はもうないのよ。そのグルグル巻かれた包帯から下はもうないのよ」と言ったら京子は泣き崩れた。旅二は腕を持ち上げようとすが、腕は持ち上がらない。脳神経だけが上がっている。

右手がザクザク痛む。気がついたら左も痛い。脳の命令で動かそうとしている。ないものは動かないはずだ。

どこに行つたんだ。俺の腕は……？

先生は「手術して付けられるものならつける。あんなにグジャグジャに崩れた腕は付けることはできないんです」という。

旅二は「指だけ付かないか。腕はいらさないから……」

京子は「そんな気が悪いこと出来ないわよ、腕の途中から指が出ていればお化けよ。そんな人間ではない」

先生が来た。開けっ放しのドアをノックして。

旅二は「先生つかないんですか。腕は……？」

先生は「付けられれば付けている。付けられないんだよ。諦めてください」「つけるだけつけてよ。動かなくてもいいから……」旅二は形だけいい

特にKIDS企業会に熱を入れていた。

いつもありがとうといわれる立場の人だった。臥薪嘗胆の性格だった。なくてはならない人、尊敬できる人と言われた。人を支える人生を歩んでいた。疾風迅雷の人だった。

この事故で一変した。この事故で支えられる人生へ変わると思ったらたまらなく淋しかった。

京子に飯を食わしてもらうとは夢にも思わなかった。トイレもできない。歯も磨けない。風呂はどうすればいいのか。しかし現実である。

入れ替わり立ち代り見舞いが続いた。病室が花と果物でいっぱいになった。家族の暖かさ、その存在にあらためて感謝した。

少年野球、KIDS企業会の子どもの見舞いが励みになった。仕事上のライバルである建設会社から、塩が送られてきた。仕事はライバルが人間のライバルはいない。何年も連絡をとっていない友達も励ましの手紙や電話をくれた。暖かい手を差し伸べてくれた。人間的友情をしみじみ感じた。何物にも代えがたい思いやりのある言葉が胸に響いた。

夜な夜な眠れない。天井を見ていると、事故当時のことが走馬灯のように脳裏を霞む。これからどうなるんだろう。目の前が真っ黒になった。

西大銀行預金係の加藤雅美のことを思い出した。雅美は学友の娘である。

雅美は、駅階段であと二段で頂上という時、ふと正面を見ると彼女の顔のすぐ前に人がいる。次の瞬間その人とぶつかったのか、それとも彼女がビックリして、後ろに退け反ったのかはつきりしないが、後ろ向きに頭から落下した。その間の記憶は何もない。

顔の中に内出血を起し、四肢の不完全麻痺で手足の機能をほぼ失った。幸いなことに、手指の機能は失わず、字を書いたり箸を持つことは出来た。

この日を境に人生は大きく変わった。もう何もかも終わりだ。歩けるようになるのかなあ。歩く自由を奪われた今、今までのように飛んだり跳ねたりすることが出来なくなった。階段が登れなくなった。行きたいところへ行けなくなった。車椅子に座ったままだとお気に入りの洋

と思っていた。

先生は「旅二さん、つけられるものならつけています。付けられないです。諦めてください、お気の毒ですけど……」

目の前が真っ暗になった。これからどうなるんだ。最後に、自分の生きてきた今までのすべてを知っている腕を……。見ておなくては。身体の一部だから。

見たかった。五感の一部がなくなるうとは夢にも思わなかった。二度と見ることはない腕を……。

「どこにあるんですか。見せて下さい」と先生に聞いた。自分で確かめたかった。

先生は「見ないほうがいいよ」と言った。

自分に言い聞かせた。しかし諦め切れない。えらいことになった。京子は「相手に事故を負わせたら大変だった。自爆だったので諦めようよ」

旅二は、一部が死んだんだから「部分葬式」をやらないとだめだなあ。和人は「命があっただけよかったよ。不幸中の幸だと考えるより仕方がないよ」

娘が慌てて病室に飛び込んできた。「お父さん大丈夫？ 死んだかと思つた。よかった。生きて……」

由美は旅二の横向きの目から一粒の涙が流れていたのが見えた。旅二はぬぐうのを忘れていた。由美の顔がかすれて見えた。髪が肩を撫でているのがわかった。

こんな事故で、家族が集まってくれたことがうれしかった。一瞬高原の風のように心を元気にしてくれた。

旅二の家族の五風十雨は、今日を境にお別れになりそうである。旅二は由美と和人の顔を見てそう思った。ごめん、こんなことになって……。ちよつと気をつけられなかったのに。みんなに心配をかけて悪かった。心の中でそうわびた。涙線が緩むのを抑えた。

旅二は百姓四代。百姓の傍ら地元銀行の渉外顧問、地元建築会社役員、道路建設、治水工事等の顧問、農協の相談役として活躍。子どもの教育、

服が着られない。三年後ソーシャルワーカーを目指して大学へ。その二年後結婚。バリアフリーコンサルタント、環境コーディネーター、小、中学校講演活動中。夢は車椅子でのファッションモデルになることであるという。

もう、傷ついたり落ち込んだりしない。嬉しく楽しい生活を送っている。かけがえのない世界を見出した。

神戸の手足麻痺の少女がいる。筆を口にくわえて絵を書いている。足で筆を挿んで絵やオブジェを書いた。障害者ではなく個性としてとらえてほしいと訴えた。

サンタクララの青年が交通事故にあった。信号待ちのトラックに激突した。左足の膝から下を切断した。肉体の一部を失ったけど、精神は無傷のまま。自分が事故前と何も変わっていないことに気づいたとき、この先の道が、これまで想像していた片足になったことで、不可能なことが多くなるという不安ではなく、大きな可能性が生まれたという希望を抱いたのだ。今までよりも素晴らしいものになるだろうと彼は確信した。

スキー、アイスホッケー、自転車競技、トライアスロンで全米代表のアスリートに選ばれた。輝かしい実績を残した男の人生応援歌の話も本で読んだことがある。

友達や家族から励ましの言葉をもらったが、心の底にはこれまで当たり前前のこと、もうこれからは出来ないんだという思いが澱のように溜まっていた。

旅二は天井を眺めていると恐怖が戻ってくる。これからどうなるのか。自問自答した。結論はそう簡単にはでなかった。

「身障者になったが敗者ではない。弱者でもない。いつでも出直しはできる。その時が再出発である」と強がりも言っても現実は甘くはなかった。ここから始まる自分の人生は、自分に勝つ以外ない。

自分と向き合う日々の積み重ねとなった。いままでは流した汗は裏切らない。行動すれば何かが変わる。そして自分の精神に、忠実に生きていけば、どんな苦境にも必ず明るい道が開ける。その事例を自分が示すことで、人々に一条の光を投げかけることが出来

る。そう信じた。障害者でも、自分の足で歩くんだ。他人の力を借りないで歩く。甘えることはしない。障害者は健康者の裏返しだと心得、不安定な状態に置かれれば置かれるほど努力する。皆との接点を失ったら終わりだ。新しい体験でいやな過去を消そう。このままでは死ねない。好きなように生きて、好きなように死のうと心に決めた。皆の喜ぶ顔を見るために立ち向かおう。夢を見た。みんなのありがとうをもう一度聞きたい。そんな夢を……。

多くの愛を受け多くの親切を味わった。ライバルからも復活を期待された。旅二は平衡を失わない気質を持っている。突然起きたこの事件が、一切を変えた運命でもあった。みんな犠牲を払ってお見舞いの心を献げてくれた。これを素直に受取ることが皆に対する御礼の印である。最高の至福と受け止めた。世間にはライバルばかりでないということを感じた。皆暖かい心で応援してくれている。裏切るわけにはいかない。多くの人間が、不自由に圧迫されている時代は、言葉ではなしに行動で支えることの大切さを感じた。これから恩返しをしよう。人間の魂に触れた活動をする事が出来れば恩返しができると確信した。旅二は「手がないだけだよ。命はあるんだ。死んだと思えば何だってできる。世の中には障害者がいっぱいいる。俺は軽いもんだ。よし、俺もできる。できないことはない。今が発点と考えた。ネガティブな性格にはならないようにしよう」

義足技工士に頼むことにした。四谷の義足技工師である。障害者がスポーツをやるための技工士だ。「今までやってきたのは、足とか手の片方の義足・義手である。ところが両手の義手は初めてだ。前から特注の義手を作りたいと思っていた。適当

業にしようとかがんばっている人もいる。本当にうまくやればうまくいくんだよ。水も豊富だし、四季の変化に恵まれているしね。刈った草を堆肥にする。有機栽培ができる。いい米ができる。

ところが農協が化学肥料をどんどん売る。高い農機具を売る。皆自分の金儲けのことばかり考えている。農民のことは考えようとしな。自立できる農業にしようと立ち上がったところだった。

県会議員、市会議員はでたらめが多い。農業なんかも真剣に考えるのが政治だからね。

「農民も米価を上げるとか、補助金を出せとか主張する。それは皆自分の懐からの税金であることを認識しなくてはならないよなあ。今後農民のために働いてくれ。乾いた心を潤して欲しい」

治水工事も道路工事も一巡したところであった。我が家の農業は京子だけではできない。和人もやれない。しばらく休耕田にしておくことになった。

子ども企業会は後継者に引き継いだ。子どもが成し遂げた結果の損益検討会には出ることにした。

子どもが鳥になって光をくれた気がする。現実から逃避しては負けになる。

右義手に筆をくりつけた。墨を筆先にベッタリつけた。真っ白い紙紙を汚すだけだった。絵にも字にもならない。駄目だ、これは。出来ない。「猿のほうかうまい。俺には無理だ」

絵画道具一式は六畳の部屋に揃った。うまく使えるようになるだろうか。広げた画仙紙の上に寝ころがった。目をつぶった。病院の天井を思い出した。あの時の思いを再確認した。それは敗者ではない、今が始りだ、ということを……。

目を開けると天井の木目がやけにくつきりしている。でも統一性はない。なみがあり、節があり、何かに似ている木目あり、さまざまである。年輪を刻んだ天井である。すべてちがう。同じものはひとつもない。これでいいんだよこれで。ち

な患者が見つからなかった」と話し「是非やらして下さい」と言った。旅二は喜んで実験台になることにした。

六ヵ月後義手は完成した。

義手の部分には、カーボン製のソケットが取り付けられた。一見単純な作り方に見えるが、軽くてフィット感がよかった。仕上がりもいい。身軽に機敏に動きが出来る。サスペンション装置も思いのまま動いてくれた。ダクトテープに頼る必要もなくて、手首がよく曲がる。これでいらいらすることもなく、思うように生活できそうだ。環境は一変したがやる気は前と変わらない。

旅二はこれで飯が食べる。トイレも行ける。ズボンも履ける。外へ出られる。

ありがとう。腕がなくなって感謝している。人の優しさを知った。こんな幸せ。このままでよい。鉄人が腕をなくして喜びをえた。大切な人のために生きることができた。腕をなくしたことで優しさの人生に出会えた。旅二は「人生の余白が少なくなったが、今までやれなかったことをこれからやろう。冬眠中に起こされた感じだ。わびとさびの世界に少しでも近づこう。」

すべてTodayだけピアンビシャスが燃えてきた。全身元気時代のように満足感、緊張感はないが、頭を使うことはできる。他人に迷惑をかけないうちに、今の組織、団体から身を引くことにした。引き際がむずかしいのは、経営者だけではない。各種団体、教育界、あるいは家庭においても同様。出処進退に常日頃の生き方が問われる。

引継ぎを行った。

農協の委員会に現在取り組んでいる次の事項を報告した。しっかりと引き継いでやって欲しいということをお願いした。議長はこころよく引き受けてくれた。

今の農民は農業振興に取り込むのではなく、なんだかんだ言いながら自分だけの利のために議員を動かして補助金を獲得する者が多い。でもこつこつ着実に農業の発展につくしている人がいる。自立できる農

がつてあたり前。これが個性だと気がついた。

墨絵は自由に描くのではなく自由になるために描けばいい。アンティークでいい。心に暖かい火を灯す絵でいい。トラウマにかからないようにして……。

オコゼみたいな、一風変わっていても個性抜群な者を作りたい。

障害者は皆違った個性をもって乗り越えてきている。

障害者の前向きで且つ、不屈のチャレンジ精神や、やればできるんだという信念がわかった。

終着駅に来たかという気がする。それは裏返せば緊張感、達成感。それが目的なのだ。その達成感を上回るものは、どこを探してもない。

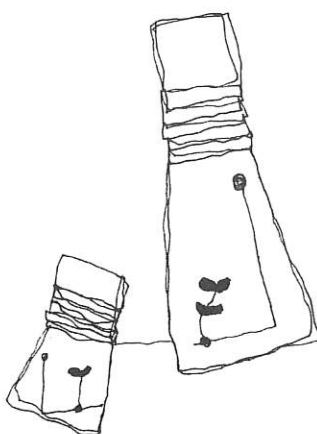
義手を提供してくれたひとに感謝する。これまで陰日なたに支えてくれた多くの人々に感謝する。助けがなかったら今の俺はなかった。

自分の選んだ墨に精一杯の力を注いできた。その信念を貫きとおしてきたことが、目に見えない力となっていたことも信じて疑いない。

ほんの小さなワンポイントでいい。世界に二つとないものに向って歩もう。

今日も三ヵ月後の個展に向けてキャンバスに向かっている。明日が見えてきた。

〔相模文芸〕14号より転載





# 相模文芸

## 相模原市の文学状況を変える

文芸同人「相模文芸クラブ」は文芸愛好者の集まりとして友好的に運営されています。会の結成は平成十二年一月です。現事務局の外狩など三名が呼びかけ人となり相模原市内の公民館にポスターを貼り出して会員を集めました。

「私たちは挑戦します。私たちは文化を立ち上げようと、文学を生み出そうと、この町に住む総ての皆さんに心から呼びかけます。相模原市の文化史を文学状況を変え、作り、育て上げるのはあなたです」



合評会風景

〔呼びかけ文より〕  
創刊号は十二年三月三十一日に発行しました。以後少しずつ会員は増加しています。七年目を迎えた平成十九年には四十名を数えるところまできました。

主な活動は年二回発行の同人雑誌「相模文芸」の制作です。そしてここに発表された作品を毎月一回の合評会で読後感想を交わします。会合には二十名前後の会員が参加します。

さらに、文学散歩や忘年会・講演会などの行事を年間四〜五回行っています。会は中高年の男女約半々で構成されています。

成されています。会長・会計・編集などの世話役を置き運営してきました。月額千五百円の会費と作品参加費（ページ千円程度）などや企業広告と販売代金で赤字の出ないよう遣り繰りしています。作品には制約をつけず散文も詩歌も何でも集めています。二百ページ以上の同人雑誌を約三百部発行しています。会員配布した残りは雑誌社や作家などへも寄贈します。さらに市内の書店でも販売しています。毎回七割位の会員が作品参加しますが、強制はしていません。作品の批評を拒むことも他者の作品感想をパスすることも自由です。

毎回の合評会は主に水曜日午後二時より四時過ぎまでに行います。閉会後は飲食付きの二次会を持ち文学青年時代に若返り大いにはしゃぎます。

市内在住の会員が八割ですが、広く東京・埼玉・横浜などの会員もいます。誰でも気軽に入会していただきたいと入会金は無料にしています。

高齢化社会の生きがい探しのひとつとして行政とも提携しながら地域活性化の展開を強めています。学び合いと語り合いの場に多数の仲間の参加を呼びかけています。

会は創設以来専門家の指導を受けずに全員平等での向上を学び取ってゆこうと和気藹々の集まりを続けています。

今後は団塊世代なども多数参加してくるでしょう。また、学生などの若い世代へも呼びかけを強めています。



文学散歩でのスナップ 「今日を大切に」

会員拡大に取り組みます。政令指定都市を目指す七十万人都市相模原市にふさわしい文芸集団としての品格を付けて行きたいと考えています。

市民に愛され市民の手で運営される名実共に「相模文芸」に育ってゆきたいと思っています。

### ●相模文芸

発行者◇植木庸充  
事務局◇〒2229・0035 神奈川県相模原市相生二・六・一五 外狩雅巳  
TEL042・752・0169

## あなたも選考に参加してください 8月18日

# 全国同人雑誌最優秀賞公開選考会

- 全国同人雑誌振興会・文芸思潮では、全国同人雑誌最優秀賞を選考決定します。公開による方法ですので、どなたでもご参加できます。
  - 候補作品はこれまで文芸思潮に同人雑誌優秀作として掲載された作品です。文芸思潮13号「どこかでなくした左の世界」(古澤崇/「じゅん文学」45号)、「壺中美人」(高下俊哉/「空飛ぶ鯨」6号)、および文芸思潮17号「乙姫通り」(宮崎真弓/「いかなご」2号)「エスプレッソが冷めたら」(水木怜/「照葉樹」2号)の4作と本号掲載の2作品「ばら屋敷」(名村和美/「海牛」26号)、「両手にありがとう」(本城確/「相模文芸」14号)の合計6作品です。
  - 選考会は8月18日(土曜日)に奥多摩の文芸思潮夏期文芸合宿会場で午後2時半より開かれます。郵送による投票だけでも参加が可能です。どうぞあなたも選考委員になって最優秀賞を選んでください。
- 選考委員ご希望の方は全国同人雑誌最優秀賞選考委員申込書を文芸思潮に投票用紙とともにご請求ください。
- 選考委員申し込みの方に掲載号(有料)をお送りします。文芸思潮の定期購読者は、候補作品を読んでいたいただければそのまま選考委員になれます。お申し込みだけで、文書選考委員となることができます。詳しくは次ページをご覧ください。
- 夏期合宿などの詳細は文芸思潮全国同人雑誌係まで参加要領をご請求ください。

### 夏期合宿 & 第1回全国同人雑誌最優秀賞公開選考会

## 文芸思潮 夏期文芸合宿

夏期合宿係公開夏期文芸合宿に参加してあなたの手で最優秀賞を選んで下さい。

文芸思潮では、この夏8月18日・19日に吉川英治ゆかりの奥多摩で夏期文芸合宿を行い、そのなかで、全国同人雑誌最優秀賞を徹底的に話し合った末、投票で決定いたします。また文芸講演会もあります。こころゆくまで文学を語り合い、文芸の時空を楽しみませんか。

作家集団「塊」メンバー・文芸評論家参加

1泊2食付 25000円

どうぞご参加ください。

●お問合せ・お申し込みは下記へ  
文芸思潮 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 TEL&FAX03-5706-7848

Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp

8月18日・19日

### 奥多摩夏期文芸合宿

奥多摩御岳山「憩山荘」  
8月18日10時青梅線「二俣尾」集合  
吉川英治記念館見学  
文芸講演会/勝又浩「中島敦の文学」  
全国同人雑誌最優秀賞選考会  
懇親会  
小説作法勉強会 & フリーターキング  
川合玉堂記念館見学

# 全国同人雑誌賞 最優秀賞の創設

## および公開選考会について

### ●全国同人雑誌最優秀賞

全国同人雑誌振興会および作家集団「塊」KAI、文芸思潮では、日本および世界の日本語表現による文芸同人雑誌の顕彰と賞揚を行ない、各同人雑誌と提携して、文芸同人雑誌および小説創作活動の振興を図りたいと思います。この目的のため、全国同人雑誌最優秀賞を創設します。

これにより優れた作品が文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。よろしく御理解、御支援、御協力のほどをお願い申し上げます。

※またこの最優秀賞の名前を別に公募します。全国同人雑誌最優秀賞にふさわしい賞の名前を御提案ください。

### ●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程については以下の通りです。

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品（3年以内）のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌賞優秀賞を贈り、同時に最優秀賞選考の候補作品とする。優秀賞は6篇前後とする。優秀賞には賞金1万円と賞状・記念品を贈る。
- ② 毎年夏に特別選考委員と一般選考委員とが集まり、公開の下に候補作品について十分な討議・討論を重ねたのち、投票により、最優秀賞を決定する。全国および海外からの送付による投票も点数に加える。
- ③ 選考委員は候補作全作品を読んだ者とする。
- ④ 選考委員は特別選考委員と一般選考委員（選考会参加）、および文書選考委員（選考会不参加／文書のみ）によって構成される。一般選考委員、および文書選考委員は希望志願とする。
- ⑤ 各委員投票持点は特別選考委員50点、一般選考委員10点、文書選考委員は3点とする。一般選考委員、および文書選考委員の人数枠は第1回は設けない。
- ⑥ 文書選考委員の投票は公開選考会一週間前に行い、選考会当日までに開票集計を明らかにする。
- ⑦ 最優秀賞は一人が原則だが、同水準の場合は二人もありうる。
- ⑧ 最優秀賞には5万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。（賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、将来賞金額を上げていくことが望まれる）
- ⑨ 2007年度の特選考委員は、作家集団「塊」KAIメンバー、河林満・八覚正大・小沢美智恵・大高雅博・五十嵐勉とするが、さらに加わる場合もある。
- ⑩ 最優秀賞選考過程は「文芸思潮」に発表する。

●この賞を継続することによって、同人雑誌による文芸創作活動の奨励を図りたいと思います。つきましては、優れた作品を御推薦いただき、また皆様の発行されている同人雑誌をぜひ文芸思潮および全国同人雑誌振興会にお送りくださいますよう、心からお願い申し上げます。

●この全国同人雑誌賞は、多くの方に参加していただき、その賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ同人雑誌からの文芸復興をめざして奮って御参加いただきたいと切にお願いするしだいです。

2007年6月25日

全国同人雑誌振興会  
作家集団「塊」KAI  
文芸思潮

# 全国同人雑誌賞最優秀賞ネーム公募!

## 全国同人雑誌賞最優秀賞の名前を募集

全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、全国同人雑誌賞最優秀賞を表す賞の名前を公募します。例えばゴールデンアロー賞とかダイヤモンド賞とかのカタカナ語、あじさい賞とか富士賞とか万葉賞とかの和語でもけっこうです。同人雑誌の活動と文学創作にふさわしい、画期的で斬新な賞の名前をぜひ皆さんから御提案ください。

その名が選ばれ、当選された方にはささやかで恐縮ですが1万円の賞金と記念品を贈呈させていただきます。選ばれた名前が、全国同人雑誌最優秀賞として引き継がれていくことになります。皆様からの心のこもったネーミングをお待ちしております。以下の要領で、ぜひ奮って御応募ください。

### 全国同人雑誌最優秀賞の名前募集

- 同人雑誌活動とその最優秀作品を象徴する名前 10字以内
- 締め切り 2007年9月30日
- 応募者は①氏名②年齢③郵便番号④住所⑤電話番号⑥職業を明記の上、郵送またはFAXで以下にお送りください。メールでもけっこうです。
- 送り先 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 アジア文化社 文芸思潮「全国同人雑誌最優秀賞ネーミング係」  
FAX03-5706-7848  
Mail: asiawave@qk9.so-net.ne.jp
- 発表 文芸思潮 20号ウェブ誌上（2007年11月25日発売）
- 当選者には賞金1万円と記念品、文芸思潮1年分を贈呈いたします。

## 第1回全国同人雑誌最優秀賞投票用紙

⑥	⑤	④	③	②	①	番号
「両手にありがとう」本城確 「相模文芸」14号 文芸思潮18号	「ばら屋敷」名村和美「海牛」26号 文芸思潮18号	「乙姫通り」宮崎真弓「いかなご」2号 文芸思潮17号	「エスプレッソが冷めたら」水木怜 「照葉樹」2号 文芸思潮17号	「どこかでなくした左の世界」古澤崇 「じゅん文学」45号 文芸思潮13号	「壺中美人」高下俊哉「空飛ぶ鯨」6号 文芸思潮13号	短評
点	点	点	点	点	点	点数
持ち点	選考委員名	住所 〒	TEL			文芸思潮会員の場 合は会員番号を、非 会員の場場合は×を記 入してください。 No.

※点数は持ち点の中から合計最大が持ち点となるようにつけてください。  
一人に限らなくてもけっこうです。

※評がたくなる場合は拡大コピーを取ってご記入ください。 ※当日参加できず、郵送などによる投票の場合はこの投票用紙またはコピーにご記入の上8月10日までに文芸思潮・全国同人雑誌最優秀賞選考委員会宛にお送りください。